

大野城市の文化財

第53集

—発掘された大野城市の遺跡—



2023年

大野城心のふるさと館

序

大野城市では、特別史跡水城跡・大野城跡をはじめ、旧石器時代から近現代に至る様々な遺跡が見つかっており、今なお多くの遺跡が地下に眠っています。心のふるさと館では、各種開発や史跡の整備に伴い市内各所で発掘調査を実施し、その成果は文化財調査報告書として随時刊行しています。

令和2・3年度は、縄文・弥生時代から近現代におよぶ21の遺跡について19冊の発掘調査報告書を刊行し、遺跡から見た「大野城市らしさ」を語る手がかりが蓄積しつつあります。

本書は、令和4年度の大野城心のふるさと館の企画展「発掘された大野城市の遺跡」の内容を元に作成したものです。近年発見された遺跡や関連遺跡の資料を中心とし「時代はかわる」をテーマに、大野城市の遺跡についてご紹介します。

時代は「平成」から「令和」へ移り、さらには新型コロナウイルスの影響により、今まさに時代はかわりつつあります。

本書を通じて、大野城市で生きてきた人々の営みをご覧いただくと幸いです。

令和5年1月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

凡 例

1. 本書は、令和4年度大野城心のふるさと館企画展「発掘された大野城市の遺跡」（令和5（2023）年1月13日～3月24日開催）の内容を元に作成したものです。

2. 本書は、大野城市心のふるさと館文化財担当職員の石木秀啓・石川健・上田龍児・林潤也・山元瞭平が分担して執筆し、編集は石川・上田が行ないました。

3. 本書に掲載した写真・図面のうち、第1・2図を石川が、第7・9図を深町美佳が作成、写真1・3を上田が、写真2を牛嶋茂が撮影しました。また、写真21は赤司岩雄氏が撮影し、赤司清子氏から提供を受けました。その他は各発掘調査報告書に掲載した資料から転載しました。

目 次

1. 大野城市に農耕文化がやってきた！～縄文時代から弥生時代へ～

- (1) 大野城市最古の農村！？ 1
- (2) 時代が変わりうつわが変わる 1
- (コラム) 人骨からみた縄文と弥生 2

2. 弥生の聖地と古墳の出現～弥生時代から古墳時代へ～

- (1) 瑞穂墓地の変遷 3
- (2) 弥生時代の聖地 4

3. 祈りの変化～古墳時代と平安時代～

- (1) 古墳時代の儀礼を復元する 5
- (2) 大規模開発の時代に大地に祈る 6

4. 土器作りの変化～古墳・奈良時代と平安時代～

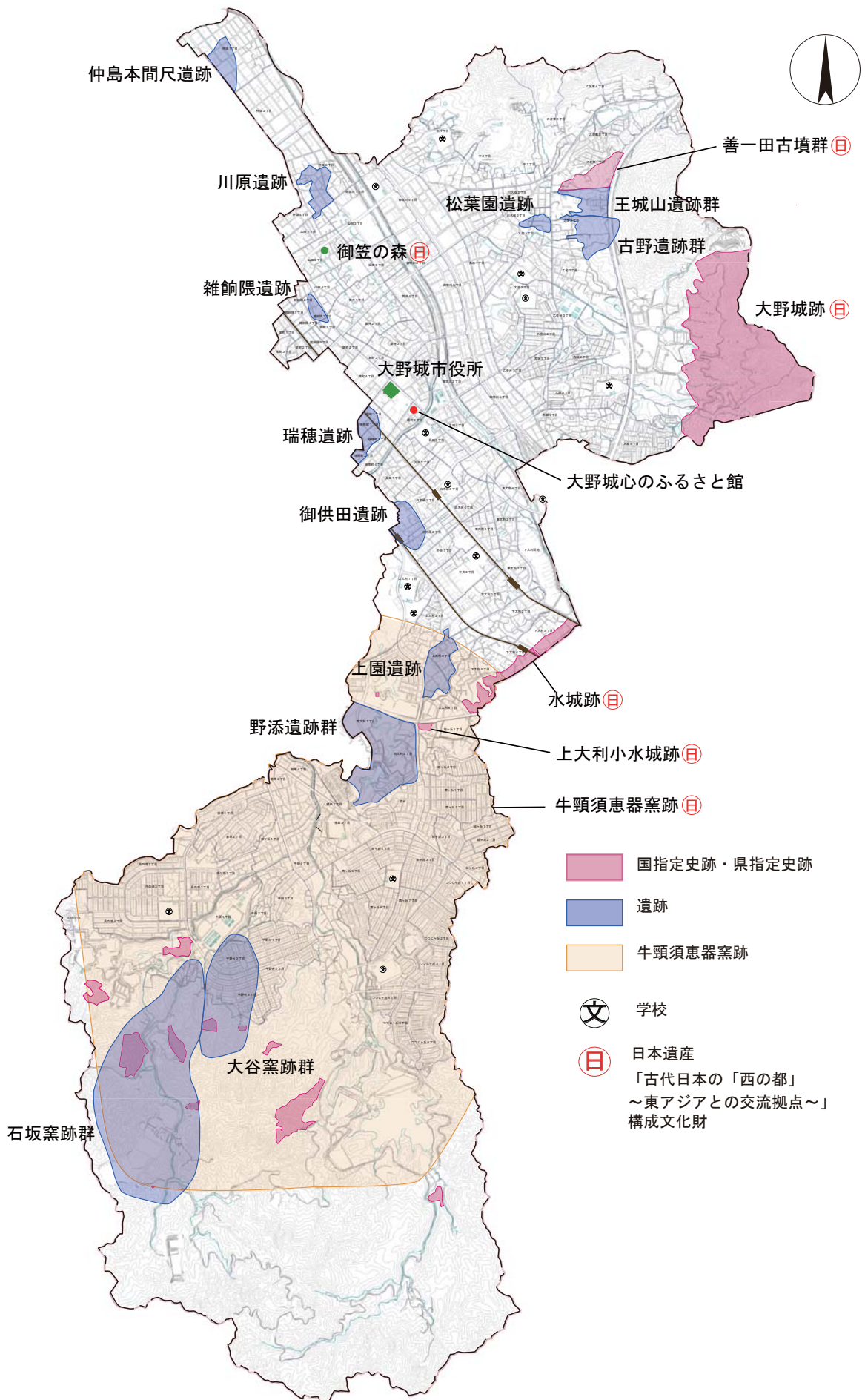
- (1) 役人の必需品―須恵器のすずり― 7
- (2) 土器生産再来 8

5. 江戸の村から昭和の町へ～江戸時代と昭和時代～

- (1) 雑餉隈の宿場のにぎわい 9
- (2) 戦前・戦後の大野城市 10

用語解説

参考文献



第1図 本書に登場する市内の遺跡と史跡等

1. 大野城市に農耕文化がやってきた！～縄文時代から弥生時代へ～

縄文時代から弥生時代への移り変わりの特徴は、稲作農耕の導入やさまざまなモノの変化によって日本列島で生活する人々に大きな変化をもたらした点で、日本列島の歴史において特異な時代といえます。

ここでは、大野城市の弥生時代の中で最も古い仲島本間尺遺跡や川原遺跡について紹介します。

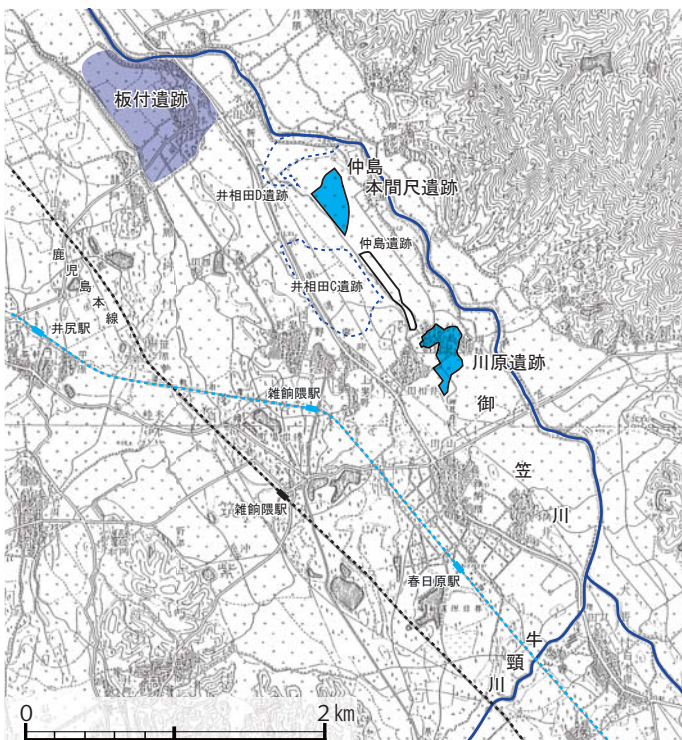
(1) 大野城市最古の農村！？

日本で最も有名な弥生時代の遺跡の一つに、日本最古の農耕集落として知られる福岡市博多区の板付遺跡があります。御笠川に面した市域北部の仲島本間尺遺跡や川原遺跡では、弥生時代のはじめ頃の遺跡が見つかっています。板付遺跡から直線距離で1～2 kmほどの場所にあたり（第2図）、市の北部にいち早く弥生文化が到来したことを物語ります。

また、博多湾沿岸地域の縄文時代の遺跡は標高が高い山麓部などに立地していますが、縄文時代の終わりごろになると稲作に適した低い土地に多くなることが明らかとなっています。仲島本間尺遺跡や川原遺跡も低い土地にあることから（写真1）、水田を営む大野城市最古の農村だった可能性があります。

(2) 時代が変わりつつ変わっていく

縄文時代から弥生時代への変化の時代には、土器にも大きな変化が見られます。縄文時代の土器は鍋・釜のような調理のための土器と食器が主要な土器ですが、弥生時代になると新たにモノをたくわえるための容器である壺が誕生します（写真2）。また、土器づくりの仕上げの道具として、縄文時代には貝殻を使うことが多かったのが、弥生時代になると木製の工具を使用するようになります。壺や土器作りの技法は同時代の朝鮮半島のものによく似ており、米作りをはじめとする様々な文化や技術が朝鮮半島から伝わったと考えられます。



第2図 仲島本間尺遺跡・川原遺跡の位置と板付遺跡の関係



写真1 現在の御笠川（仲島本間尺遺跡・川原遺跡は左岸（写真左手）にある）

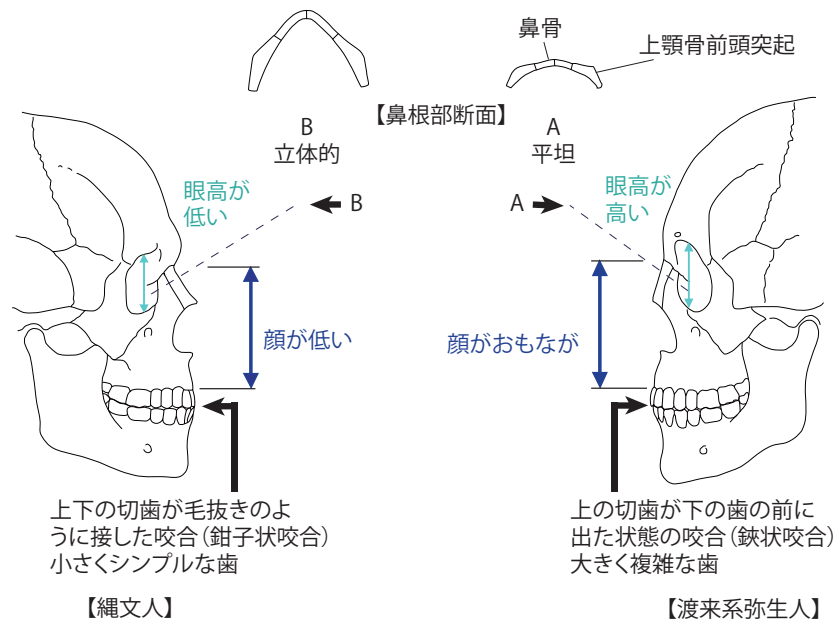


写真2 川原遺跡で出土した弥生時代開始期の土器

(コラム) 人骨からみた縄文と弥生

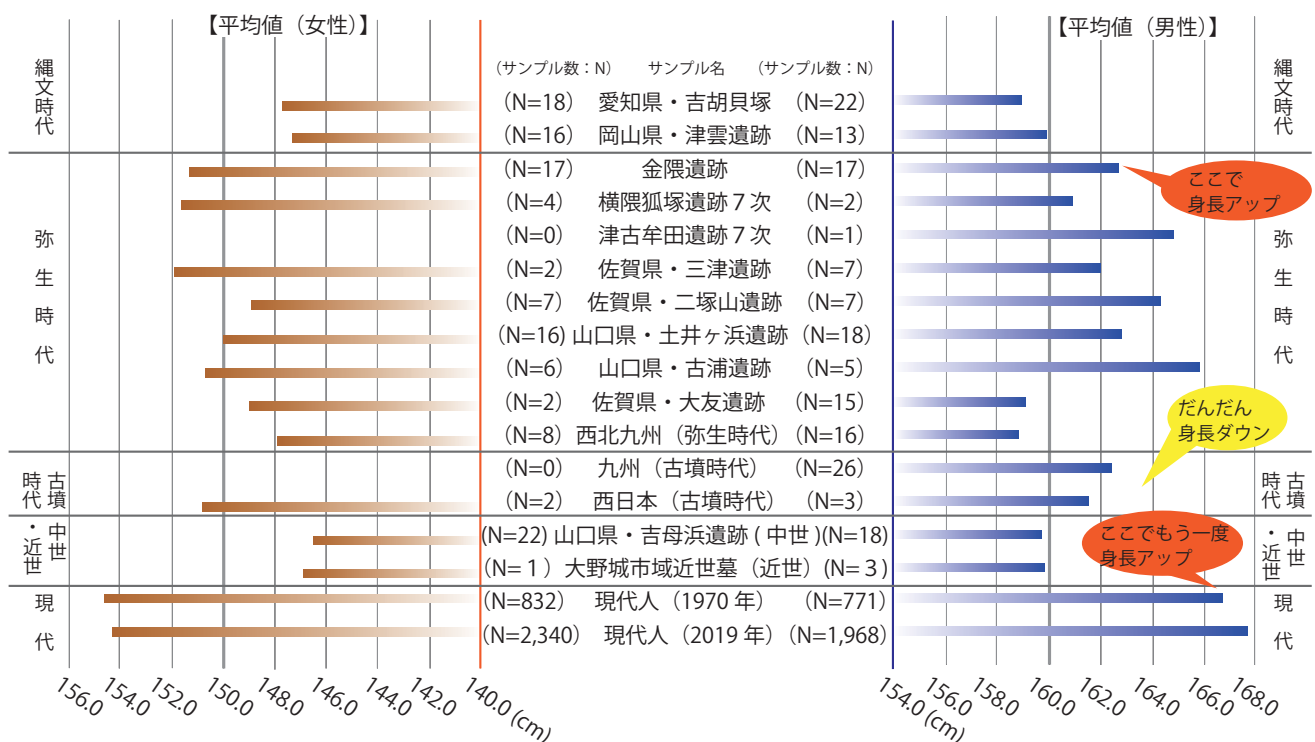
縄文時代から弥生時代へ移り変わるころには、朝鮮半島からの影響による様々な文化の変化にくわえ、人の骨格や顔立ちにも変化がありました。もともと日本列島にいた縄文人(第3図左)と異なる特徴を持つ弥生人は「渡来系弥生人」(第3図右)と呼ばれています。ここでは、古人骨からわかる縄文人と弥生人の特徴を紹介します。

縄文人は顔の高さが低く幅広で立体的であるのに対し、「渡来系弥生人」は顔が長く平坦、歯が大きく男女ともに高身長といった特徴があります(第3図、表1)。弥生時代と同時代の朝鮮半島の人骨も「渡来系弥生人」と似た特徴をもっており、縄文人から「渡来系弥生人」への変化は、朝鮮半島から移住してきた人々と日本列島にもともといた人々との混血の結果と考えられています。



第3図 縄文人(左)と弥生人(右)の顔立ちのちがい(中橋2005より改変)

表1 各時代の推定身長



2. 弥生の聖地と古墳の出現～弥生時代から古墳時代へ～

市域中心部、瑞穂公園周辺の小高い丘の上にある瑞穂遺跡（写真3）では、弥生時代の甕棺墓をはじめとするたくさんの墓が見つかっています。100基を超える墓があり、弥生時代前期から古墳時代初頭までの500年以上継続する大野城市最大級の弥生時代墓地です（写真4）。

ここでは、弥生時代の墓地の移り変わりから見た社会の変化と、瑞穂公園周辺が当時どのような場所であったのかについて紹介します。

（1）瑞穂墓地の変遷（第4図）

瑞穂遺跡では弥生時代前期に墓地の形成が始まり、列をなすように多くの甕棺墓がつけられました。弥生時代中期には甕棺墓が狭い範囲に密集し、墓地の最盛期を迎えます。弥生時代後期になると石蓋土坑墓や石棺墓がつけられ、副葬品（写真7）を持つ墓もあります。古墳時代になると墳丘を持つ「古墳」が出現し、これを最後に墓地としての役割を終えました。

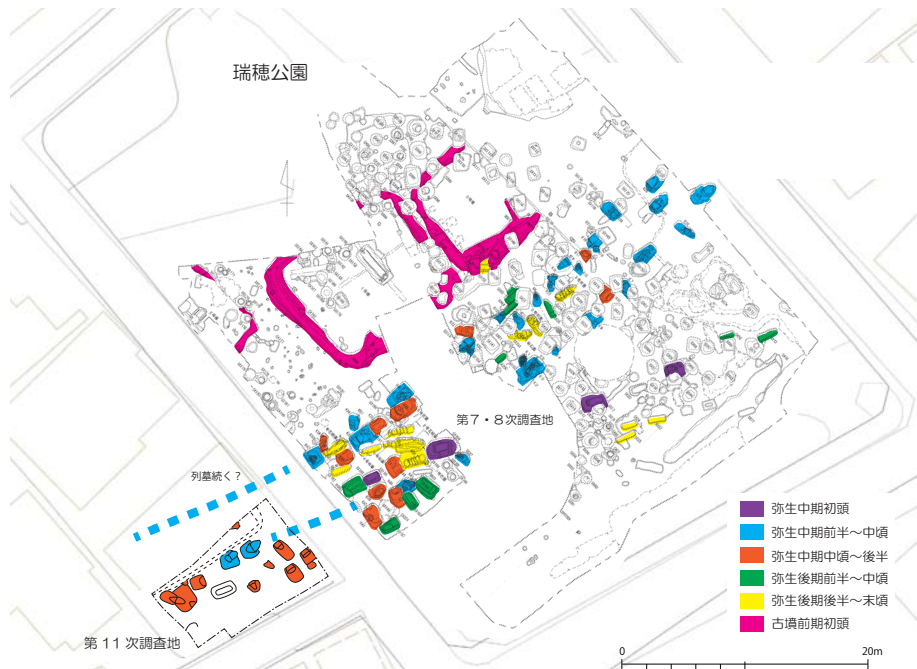
集団墓地としては始まり、次第に副葬品を持つ墓や特定個人のための「古墳」へと変化していく様子は、平等的な社会から階層的な社会へと変遷していくという社会構造の変化を物語ります。



写真3 春の瑞穂公園



写真4 密集する弥生時代の墓（瑞穂遺跡）



第4図 瑞穂遺跡の墓地の変遷

3. 祈りの変化～古墳時代と平安時代～

松葉園遺跡は市域東部、乙金山から西へのびる低い丘の上に広がる、弥生時代～江戸時代にかけての遺跡です。ここでは、古墳時代の儀礼や平安時代の墓に注目し、祈りや願いといった当時の人々の精神世界を紹介します。

(1) 古墳時代の儀礼を復元する

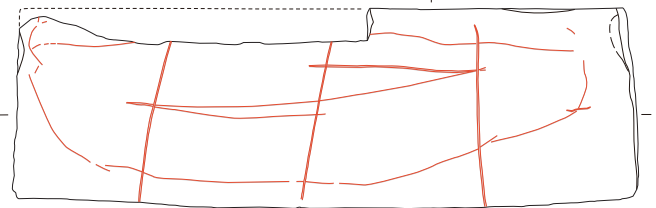
松葉園遺跡の一角で、古墳時代の土器がたくさん捨てられた溝が見つかりました（写真8）。当時の食器である須恵器杯蓋14点・杯身9点、調理用の土器である土師器甑1点・甕1点、容器である須恵器甕1点のほか、古墳時代の北部九州では非常に珍しい移動式カマド（写真10）が一緒に出土しました。これらの土器から、この場で調理・飲食を伴うなんらかの儀礼が行われ、最終的に溝に捨てられたものと考えられます。また、使い方は不明ですが、表面に線刻がある板状土製品（写真9・第6図）もあり、その特殊性から儀礼の中で大きな役割を果たした道具だったのかもしれません。



写真8 溝から出土した多量の土器
(松葉園遺跡)



写真9 板状土製品（松葉園遺跡）



第6図 板状土製品の線刻：赤線部分



第7図 移動式カマドの使用の様子



写真10 移動式カマド（松葉園遺跡）

(2) 大規模開発の時代に大地に祈る

平安時代の終わりごろ(11～12世紀)、松葉園遺跡で中国からの輸入陶磁器(白磁・青磁)を副葬する墓(写真11)が出現します。その後、室町時代までに松葉園遺跡を含む乙金地区では20基を超える墓がつくられ、ほとんどの墓で白磁や青磁が副葬されています(第8図)。また、墓のほかにたくさんの屋敷が建てられたり水田が営まれたりするなど、この頃の乙金地区では大規模な土地開発があったことが分かっています。

松葉園遺跡で白磁を副葬する墓がつくられたころ、現在の乙金宝満神社の近くにある古野遺跡では、仏教の経典を納めた経塚がつくられました(写真13・14)。大規模開発を進めるのに際し、大地に祈りを捧げる儀式があったと考えられます。



写真11 白磁を副葬する墓
(松葉園遺跡)



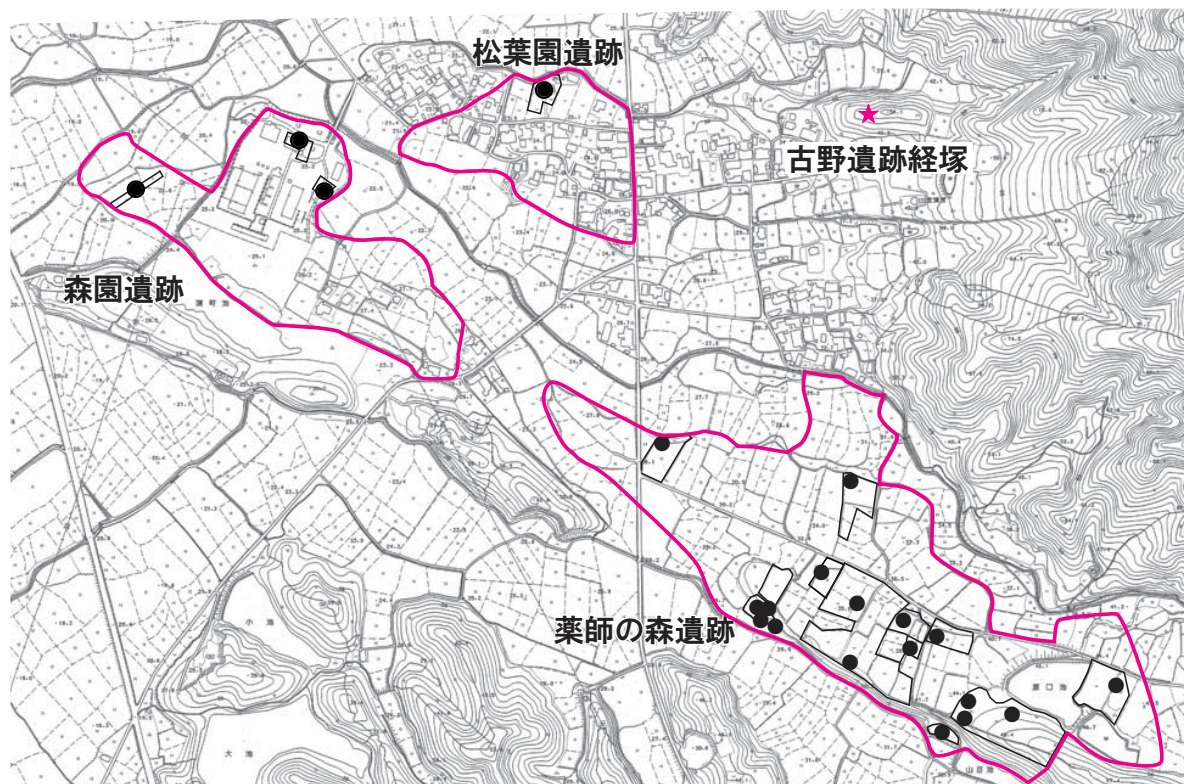
写真12 副葬品の白磁
(松葉園遺跡)



写真13 古野遺跡の経塚



写真14 経筒
(古野遺跡)



第8図 松葉園遺跡周辺の輸入陶磁器を副葬した中世墓(●)の分布

4. 土器作りの変化～古墳・奈良時代と平安時代～

市域南部の^{かみおおり}上大利・^{うしくび}牛頸一帯は、古くから土器作りの地として栄えました。6世紀から9世紀にかけては、「須恵器」作りが盛んに行われ（写真15）、牛頸須恵器窯跡と呼ばれる九州最大の窯場となりました。9世紀後半になると、須恵器作りの伝統は途絶えましたが、11世紀から12世紀になると再びこの地で土器作りの火が灯り、「瓦器」と呼ばれる土器の生産が盛んに行われました。

ここでは、古代のすずりである「陶硯」と瓦器をつくる際の道具である「棒状土製品」の2つに着目し、土器作りの変化について紹介します。

(1) 役人の必需品－須恵器のすずり－

8世紀になると大宰府の成立を受けて、牛頸須恵器窯跡で作られる製品にも変化が訪れます。新たに登場したのが、須恵器で作られたすずり（陶硯）です。大宰府に勤める役人にとって、すずりは文字を書くために必要な仕事道具の一つでした（第9図）。

最もポピュラーなものが墨をする部分が円形をした円面硯（写真16）です。台座には様々な種類の^{そうしよく}装飾があり、方形のすかし穴をあけたものや獣の脚の形をしたもの（写真17）もあります。

さて、大宰府で出土したすずりの多くは須恵器の食器を再利用したもので、円面硯のようなすずりは全体の3割ほどしかありません。牛頸産のすずりは、^{くらい}位の高い役人だけが使えるブランド品だったのでしょう。



写真15 大谷窯跡群の須恵器窯跡



写真17 獣脚硯の台座の一部
（大谷窯跡群）



写真16 円面硯（石坂窯跡群）



第9図 すずりの使用風景

(2) 土器生産^{さいらい}再来

牛頸須恵器窯跡は、9世紀後半に須恵器の生産を終えました。しかし、11世紀になると、再び土器作りの火が灯ります。上大利にある上園遺跡^{かみのその}では、いぶし焼きした金属のような光沢をもった「瓦器」が作られます。遺跡からは失敗品や、瓦器を窯で焼くときに使われた棒状土製品が大量に出土（写真18・19）しており、盛んな生産の様子がうかがえます。

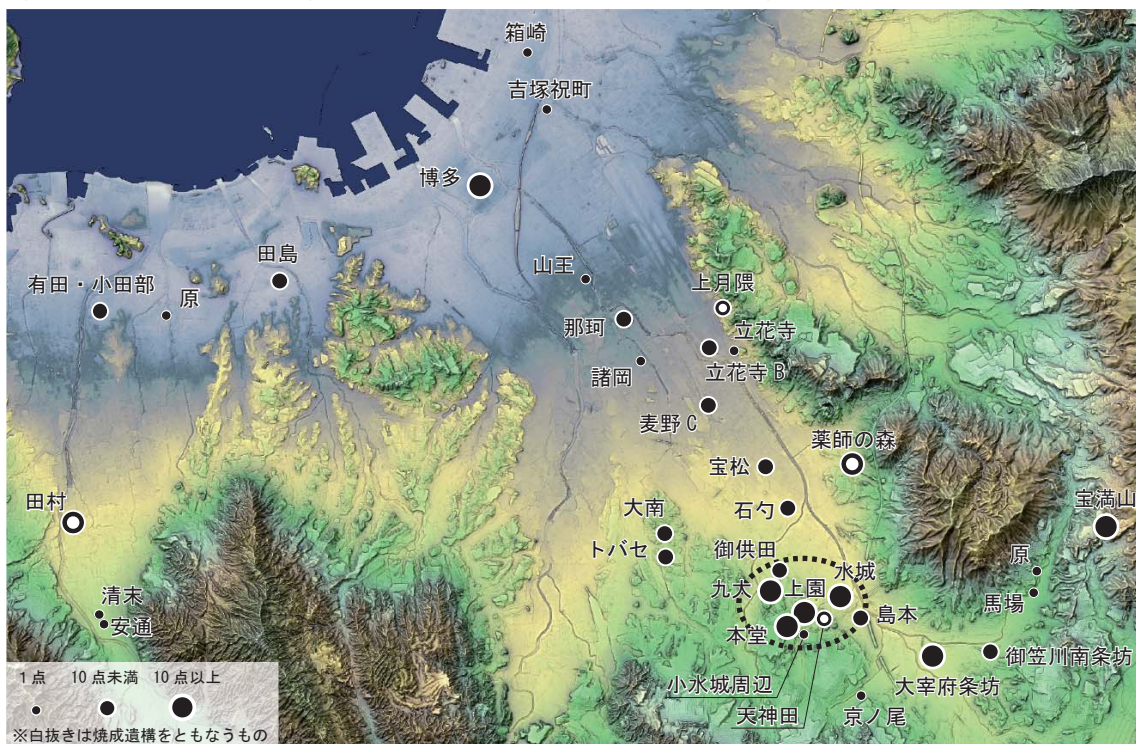
上園遺跡をはじめとした上大利周辺の遺跡は、福岡平野で最も棒状土製品が集中する地域（第10図）であり、瓦器の生産拠点といえます。土器生産の再来は、この地が土器作りに適した風土、特に粘土や燃料に恵まれた地域であったことを物語っています。



写真18 瓦器と棒状土製品（上園遺跡）

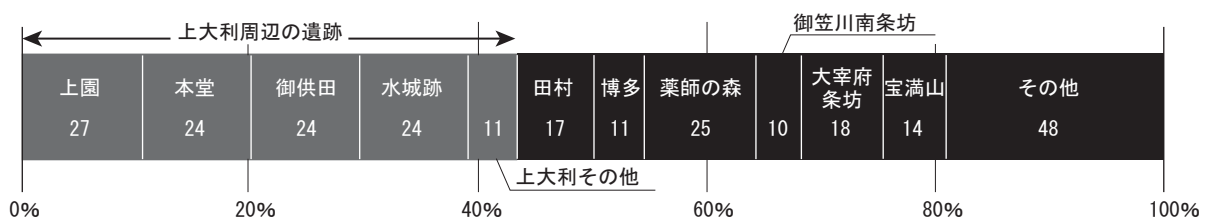


写真19 瓦器盤（上園遺跡）



福岡平野棒状土製品出土地

カシミール3Dを用いて作成



第10図 棒状土製品の分布と出土比率

※遺跡名下部の数値は出土数

5. 江戸の村から昭和の町へ～江戸時代と昭和時代～

「遺跡」といえば、弥生時代や古墳時代をイメージする方が多いかもしれませんが、市内では江戸時代以降の遺跡も多く発見されています。

この時代の遺跡を発掘すると、今でも使えそうな食器や道具が出土します。一見ありふれた道具ですが、大野城市の成り立ちや地域の歴史を物語る重要な資料です。

ここでは江戸時代の雑餉隈遺跡や、戦後アメリカ軍が持ちこんだコップなど、「これも遺跡？」といった資料を紹介します。

(1) 雑餉隈の宿場のにぎわい

江戸時代、幕府の直轄地であった日田(大分県)と博多をつなぐ街道が整備されました(第11図)。この街道は日田街道(博多往還)と呼ばれ、北部九州の大動脈として、多くの人・物・情報が行き交いました。街道に面する集落であった雑餉隈は、博多と二日市の間^{かいどう}に位置することから、小規模な宿場(間の宿)として茶店や旅籠が軒を連ね、さらに福岡藩主の休憩施設「御茶屋」が設置されるなど、大変賑わっていたそうです。

この場所にある雑餉隈遺跡からは、高級品を含む多くの食器類や調理用の土器(写真20)のほか、博多人形や石炭など、都市部(博多)と関連する遺物も出土しました。また当時の民家としては珍しい瓦葺きの建物が存在したことも判明しました。発掘調査の成果から、先進的なまちの姿や人々の暮らしぶりが思い浮かびます。



第11図 日田街道地図



写真21 昭和50年ごろの雑餉隈の様子
(赤司岩雄氏撮影)



写真20 雑餉隈遺跡出土遺物



写真22 現在の雑餉隈の様子

(2) 戦前・戦後の大野城市

太平洋戦争末期、乙金周辺では山の斜面にトンネルを掘り、航空機の部品などを製作する地下工場が造られました（王城山遺跡群）。また、水城跡や上大利の丘陵では日本軍が洞窟壕（写真 23）を掘り、中に大砲を持ち込むなど、米軍が上陸してきた時に備えた本土決戦準備が進められていました。

戦争が終わると、現在の J R 大野城駅の西側には米軍が進駐し、板付基地春日原住宅地区の整備が始まります。また、基地の外の白木原・春日原周辺には米軍ハウスがたくさん建てられ、米兵やその家族が暮らしていました（写真 24）。

発掘調査では、戦争中に使われた統制陶磁器（写真 25）や米軍が持ち込んだアメリカ産の陶磁器・ガラス製品（写真 26・27）が見つかることがあり、大野城市の現代の歴史を語ってくれます。



写真 23 洞窟壕（野添遺跡群）



写真 24 昭和 48 年ごろの白木原ベース通りの様子



写真 25 統制陶磁器
（御供田遺跡）



写真 26 米陸軍病院マーク入り TEPCO 社製マグカップ
（御供田遺跡）



写真 27 アメリカ産ウイスキーボトル（御供田遺跡）

《用語解説》

- 渡来系弥生人：縄文時代の終わり頃から弥生時代の初め頃にかけて朝鮮半島から流入してきた渡来集団が、それまで日本列島に住んでいた人々と混血した結果生まれた弥生時代の人々のこと。
- 甕棺墓：弥生時代の北部九州で広範囲にみられる埋葬方法で、棺として専用に製作された甕を地中に掘った墓坑に埋めたもの。
- 石蓋土坑墓：地下に掘り込んだ墓穴に石の蓋を覆せたもの。
- 石棺墓：地下に掘り込んだ墓穴内に扁平ないしは板状の石を組み合わせて作った埋葬施設。
- 輸入陶磁器：中国や朝鮮などのアジア各地から日本にもたらされた陶磁器を総称して輸入陶磁器という。
- 幕府直轄地：江戸幕府が直接支配した土地のこと。「天領」とも呼ぶ。
- 街道：主に明治時代以前に設定された主要道路のことで、江戸時代には幕府が管轄する五街道（東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中）と各地の領主が管理する脇往還がある。

《参考文献》

- 大野城市教育委員会 2006『牛頸野添遺跡群 3』大野城市文化財調査報告書 第 69 集
- 大野城市教育委員会 2016『乙金地区遺跡群 15～王城山遺跡第 1・2 次調査～』大野城市文化財調査報告書 第 139 集
- 大野城市教育委員会 2016『川原遺跡 4』大野城市文化財調査報告書第 142 集
- 大野城市教育委員会 2017『乙金地区遺跡群 21～古野遺跡第 4 次調査～』大野城市文化財調査報告書 第 157 集
- 大野城市教育委員会 2021『大道端遺跡－第 1 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 183 集
- 大野城市教育委員会 2021『谷蟹遺跡群－第 2 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 184 集
- 大野城市教育委員会 2021『森園遺跡 5・天神田遺跡 2・御笠の森遺跡 8』大野城市文化財調査報告書 第 185 集
- 大野城市教育委員会 2021『史跡牛頸須恵器窯跡 石坂窯跡群Ⅲ地区・長者原窯跡群Ⅰ地区』大野城市文化財調査報告書 第 186 集
- 大野城市教育委員会 2021『上園遺跡－第 8・9・11・12 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 187 集
- 大野城市教育委員会 2021『乙金窯跡・東浦窯跡群・大谷窯跡群』大野城市文化財調査報告書 第 188 集
- 大野城市教育委員会 2021『薬師の森遺跡 5』大野城市文化財調査報告書 第 189 集
- 大野城市教育委員会 2021『御供田遺跡－第 3・4・6 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 190 集
- 大野城市教育委員会 2021『雑餉隈遺跡－第 3 次・第 1 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 191 集
- 大野城市教育委員会 2022『上唐山遺跡－第 1 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 192 集
- 大野城市教育委員会 2022『上園遺跡－第 16 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 193 集
- 大野城市教育委員会 2022『後原遺跡－第 25 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 194 集
- 大野城市教育委員会 2022『松葉園遺跡－第 5 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 195 集
- 大野城市教育委員会 2022『松葉園遺跡 3 第 4 次調査・石勺遺跡 9』大野城市文化財調査報告書 第 196 集
- 大野城市教育委員会 2022『水城跡－第 64 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 197 集
- 大野城市教育委員会 2022『上園遺跡－第 3・4 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 198 集
- 大野城市教育委員会 2022『松葉園遺跡－第 2・3 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 199 集
- 大野城市教育委員会 2022『瑞穂遺跡－第 3・4・7・8・10 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 200 集
- 大野城市教育委員会 2022『仲島本間尺遺跡－第 2・3 次調査－』大野城市文化財調査報告書 第 201 集
- 中橋孝博 2005『日本人の起源（講談社選書メチエ）』講談社選書 講談社
- 日本史広辞典編集委員会編 1997『日本史広辞典』山川出版社
- 矢部良明他編 2002『角川 日本陶磁大辞典』角川書店

大野城市の文化財 第 53 集

令和 5 年 1 月 31 日

発行 大野城市心のふるさと館

〒 816-8510

福岡県大野城市曙町 2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷

〒 815-0035

福岡市南区向野 1 丁目 19 番 1 号

